

目から鱗の科学のお話

坂田三允（長野県看護大学）

この書は、あの『浮気人類進化論』『そんなバカな！ 遺伝子と神について』など、刺激的なといえいいのか、または多方面で物議をかもしているといった方がいいのかよくわからないが、ユニークな本を著している竹内久美子と、彼女の師である日高敏隆とが科学的な思考のあり方について、あるいは彼女の著書にまつわる反論も含めたエピソードについて熱い胸のうちを語りあった対談集である。つい先頃、旅行用の文庫本を探しているときにふと手にとって、そのまえがきにある「この本はほんとに竹内久美子が何時間かにわたって、興の乗るままに語りあった裏話である」という日高敏隆のことばにひかれて買ってしまった。なぜなら、私は裏話が大好きだから。

そして「論文にはもちろん書けないし、新聞に書くわけにもいかない。しかし日頃じっと心の中であって、いつかは言いたいと思っていたこと」（まえがき）ばかりが集められたこの書は期待を裏切らなかった。副題に「男と女の科学の悦楽」とあるように、第一章は「赤の女王」と性の進化というテーマである。人間のペニスは何であいうかたちをしているのか、男がマスターベーションをする理由などということについての新しい（といっても、もう古い話なのかもしれないのだが）研究の方向性や成果から始まり、父親はわが子を認知できるか、自然淘汰と進化の多様性などの話が続く。最後になぜ「性」が存在するのかへの答えとして、生物の進化の問題を論じた「赤の女王仮説」が語られるのだが、この命名は『鏡の国のアリス』から

きているのだとか。

しかし、私にとって刺激的だったのは「科学とはウソをつくことである」という第三章以下の話である。目から鱗が落ちるような話がたくさん出てくるのだ。いわく「要するに科学とは、常識的なものの見方を毛嫌いすることでしょ」「科学とは主観を客観に仕立て上げる手続き」「科学の目的は『知る』ことなんだ」「『知る』ためには、ストーリーが必要になるよね。『○○は××である』という話に『なぜならば』という理由がついて初めて1つのストーリーができるわけ」「日本では、ストーリーの面白さ、発想の面白さの部分が遊離してしまって、科学的というスタイルだけが残っちゃった」などなど。そして第五章の「かくも素敵な奇人たち」で語られるドーキンスを初めとした科学者たちの奇行の数々。第六章では「人間は、自然の法則からもう一段上のところにいる特別な存在である」という考え方が、二十世紀を支えてきた（中略）。だけど、利己的遺伝子という視点で見ると、人類も乗り物に過ぎないわけだから、それまで培ってきたものがメチャクチャになってしまう」と語られ、けれども「こういう見方でもできるかもしれないというのは、科学の本来の主旨」「とんでもないことを言いだすのが科学なんだ」（第七章）と続く。

読み終えて、日頃変なことばかり考えている私は、もしかしたら偉大な科学者なのかもしれないと一瞬思ったけれど、逆は真ならず、「なぜならば」をいえないのだから、結局単なるとんでもない人にすぎないのであった。▲



さかた・みよし

千葉大学看護学部助手、東京大学医学部附属病院（精神科婦長）を経て、1997年より長野県看護大学教授。日本精神科看護技術協会第二副会長。著書も多いが読書量も多い。しかもその守備範囲は広く、専門書からコミックに至るまで。特に好きなジャンルは推理小説とのこと。

●長野県看護大学：〒339-4117 長野県駒ヶ根市赤穂 1694